

2020年2月19日(水)

老球の細道526号

ああ！野村克也監督

会津バスケットボール協会 室井 富仁

指導者として憧れの存在であった元プロ野球監督の野村克也さんが先日死去した。

昨年のNHKで放映されたドキュメンタリー番組に出演した姿を見て、あまりのやつれように驚いてしまった。夫婦は連れ合いを亡くした後に弱ってしまうとよく言われるが、奥さんの沙知代さんを亡くした野村監督も例外ではなかった。特に男はすぐにダメになるらしい。私の父も母を亡くしてから一気に元気が亡くなってしまった。

朝日新聞では死亡の特集記事だけではなく、社説や「天声人語」などでも彼の実績や人柄、指導哲学などを掲載した。それだけ偉大なスポーツ指導者だったのである。私にとっても他スポーツ指導者の中ではトップクラスの存在であった。彼から学んだことは数知れない。

朝日新聞の社説では「ノムさん死去 月見草の知的な野球術」と題して、野村監督の人気の秘密を四つあげていた。一つは、契約金ゼロのテスト生から戦後初の三冠王に輝いた選手時代の活躍。二つは、「野球は頭のスポーツ」を信条として、それまでの野球界の精神主義や根性論を排したこと。「ID野球」などと評され、データをまとめ、整理して、具体的な指示を与えた。三つめは、選手の隠れた能力を引き出し、無名の選手を生き返らせることに力を注いだ。「再生工場」などと評価されたが、私も中学時代の無名選手ばかりを扱っていたので、参考になること大であった。最後に四つ目は、言葉の豊かさである。マスコミのインタビューや選手に何げなくかける言葉に多くの人たちは魅了された。多くの本を読み、自分でも多くの本を書き、時には古典を引用しながら選手に指示を与えていた。

私が初めて野村監督の存在に意識を向けさせられたのは、教員になりたての頃に友人からもらった野村監督の著書『敵は我にあり』(サンケイ出版)を読んでからである。友人のアンダーラインが至る所に引かれてあった。旬玉の言葉が至る所にちりばめられていた。

「山は、登ってみなければわからない。1,000メートルの山に登って初めて、その向こうに1,000メートル以上の山が見える。その頂上に立たなければ、その向こうにも高い山があることに気づかない」

「日本の投手は“結果”を意識しすぎているのです。そのため余分なところに力が入ってギクシャクする。米大リーグの選手は“過程”を意識しているのです。“どうなるか”ではなく“どうするか”を動作の軸においている」

かつて、野村監督はある週刊誌の対談で言っていた。「選手は心・技・体であるが、指導者は気力、体力、知力だ。今の指導者は読書力が不足」。思い起こせば、有能な指導者、リーダーは皆豊富な言葉を持っている。

「野村克也ー野球＝0」。「人間は使命感がなくなると頭がぼけてしまう」。40年前に書いた本にもすでに記されてあった名言である。私もそんな人生を送りたいものである。